

令和3年度 波佐見町連携事業「子育て親育ち講座」第2回目が開催されました

日時： 令和3年11月25日（木）10：00～12：00

場所： 波佐見町勤労福祉会館

波佐見町との連携事業「子育て・親育ち講座」の第2回目の講座を下記の内容で実施しました。

第1部◆◆皆で知ろう韓国と中国の育児◆◆ 対象：保護者のみ

第1部前半は、地域共生学科 国際コミュニケーションコース 李助教が、韓国の育児事情について講義形式で行った。ネット社会である昨今、韓国でも育児の情報を得るのは専らネットが主流であり、女性限定のサイトで、先輩ママ達から情報を得る事が説明された。育児アイテムについても、「国民」と名の付くものが基準となっており、誰にでも必要で、合理的な価格設定、国民からのお勧めの品々となっている。育児アイテムについても、ネットから情報を得、芸能人・有名人が行っている子育ても参考にしている事が説明された。また、お父さんと子どもとで遊びに行く！という人気番組や、月齢に合わせた知育玩具、泣いている子もピタッと泣き止む幼児番組、韓国の伝統的な遊びが多く紹介されている番組の紹介があった。その後、折り紙を用いて、韓国のメンコ作りを一緒に行った。

また、韓国では、「産後調理院」という産後の母親の休養を主とした施設がある事が紹介され、文化の違いが感じられた。助教は、国際結婚のため、日本人の奥様とどちらの国で産むのか、産後はどうするのか等話し合っているとの実体験を交えながら講義を進められ、韓国では子どもの名前に夢を託すとの事で、先生の名前の由来・名付け親の話をし、我が子にも夢のある名前を付けたいと話し後半へバトンタッチされた。

後半では、同じく国際結婚をし、現在育児中の青木講師による、中国の育児事情についての講義が行われた。中国でも、韓国同様、産後は母親の休養を目的とした「産後ケアセンター」があり、産院退院後1ヵ月利用する事が主流であると説明された。韓国では2週間で20万円程であったが、中国では紹介された安徽省の地方都市で70万円程、北京・上海等の中国4大都市では200～300万円、芸能人は、もう1桁上がるとの説明がされ、文化の違いに唯々驚くばかりであった。

次に、中国と日本の育児の相違点を6つ挙げられた。中国では、①とにかく冷やさないように厚着をさせる傾向がある、②骨がまだしっかりとしていないので抱っこする事が多く、あまり長く歩かせない、③産まれてすぐ与えるミルクの量も含め、食べる量が多い、④共働きの比率が高く、幼稚園はあるが保育園が少なく、祖父母が子育てをする事が多い、⑤産後ケアセンターやお手伝いさんを利用する人が多い、⑥受験戦争の国であるため、幼児からの早期教育に熱心である。その中でも、祖父母が孫の子育てを手伝う事が多いため、定年年齢が男性60歳、女性50～55歳と日本に比べて早い事に驚いたが、国が違っても、家族みんなで子育てをしていくという姿勢は変わらないのだと感じた。

中国では、幼児期から昔の詩を覚えさせる等、早期教育に熱心ではあるが、青木助教自身は、まずは母語をしっかりと身につける事が重要であり、外国語は大学から始めても工夫と努力で上達するとの自論を述べられ、入学後に中国語を学んだ学生による佐世保の紹介動画を紹介し、第1部は終了した。

休憩中には、掲示で紹介してあった実際の絵本やおもちゃを手にしなが、保護者からの質問に応じた。



第2部 ◆◆子育てに関するてつがくカフェ ◆◆ 対象：保護者のみ

第2部は、保育学科 紺谷助教が、てつがくカフェの発祥や内容について説明を行い、座談会形式で保護者が持っている悩みについて意見交換を行った。

てつがくカフェでは、答えを見つけるのではなく、自身の考えが変化したり、そのままでいいと感じたりする事が大事であり、発言をする・しないも本人次第で、自由でいいとの事であった。悩みをどこに相談したらいいのか？と悩んでいるという方がおられ、「なま物を最初に与える時期は？」「〇〇したい！と子どもが言った時に、OK！となるのか、今はまだ・・・と考える基準は？」等、声が上がリ、意見交換を行った。「これだ！」という答えは決まらないが、様々な意見を聞いて、自分の考えは正しいとか、こうした方法もあるという自分の考えをまとめる一助になったのではないかと感じた。

今年度の連携講座も無事に終了する事ができました。参加頂いた皆さま、どうもありがとうございました。次年度も、ぜひご参加下さい。

